深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **春秋戦国時代・戦国の七雄・諸子百家について、辞書・インターネット・資料集などを利用し、調べてみよう。**

【答】○「**春秋戦国時代**」**の概略**＝「春秋戦国時代」とは、紀元前七七〇年に周が東西に分裂してから、紀元前二二一年に秦が中国を統一するまでの、およそ五五〇年にわたる期間をいう。紀元前七七〇年から紀元前四〇三年を春秋時代、紀元前四〇三年から紀元前二二一年までを戦国時代と分ける。

○**春秋時代**＝周室の支配力が次第に衰えるとともに、諸侯が覇者として武力をもって天下に号令し、列国が争ったので、各地の経済的発展や文物の発展が顕著となった時代。その中でも、特に、「春秋の五覇」は有名であった。

○**戦国時代**＝周室の支配力は完全に衰え、諸侯の勢力が一層強大になり、群雄が割拠する戦乱（弱肉強食・下剋上）の時代となった。その中でも興亡を繰り広げたのが、「戦国の七雄」であった。この時代は、農業や工業が発展し、文化的にも「諸子百家」が活躍し、多くの思想が花開いた（「先従ㇾ隗始」解説Ⅰ「戦国時代の概略」参照）。

○「**戦国時代**」**の風潮**＝上述のごとく、戦国時代は、下剋上の世、弱肉強食の世であった。その中にあって、諸侯たちの中には、自尊心・独立心・名誉心などが強く意識される風潮が生まれてきた。

○**戦国の七雄**＝戦国時代になると、春秋時代とは異なり各諸侯が独力で天下を掌握しようとする。かつてのように「覇者」（春秋の五覇）が中心となって周王朝を支えるといったことはもはやなくなり、周王朝はついに名目さえも失い、洛邑付近を治めるに過ぎない小国に成り果てる。その中で、「戦国の七雄」（燕・斉・趙・韓・魏・秦・楚）はそれぞれが改革を行い、国力を充実させて周囲の小国を併呑し、勢力を拡大していく。中でも特に台頭したのが、西方の秦、南国の楚、東国の斉であった。次第に楚、斉が衰退していくと、秦の一強時代となった。紀元前二二一年、最後に残っていた斉を滅ぼし、ここに長く続いた分裂の時代は終焉を迎えることとなった。

○**諸子百家**＝先秦（秦の始皇帝より以前）時代の、諸学派、諸学者、またはその著作の総称。春秋時代の末から戦国時代にかけて、周王朝の権威が衰え、言論思想の発表が自由になると多くの思想家が現れいろいろな学説を発表した。最も古いのは儒家で、仁を説く孔子に始まり、孟子・荀子らによって継承され、支配階層の政治道徳として発展していった。また、儒家の礼楽を排して博愛主義を説く墨家（墨子）、無為自然を尊び、あるがままの自然の社会を理想とした道家（老子・荘子など）、刑名法術により天下を治めようとする法家（韓非子・李斯など）、一種の論理学派といえる名家、政治的な外交政略を説く縦横家、さらには農家・雑家・小説家などの、多数の学派があった。なお、儒家を除いて、諸子百家という場合もある。以上より、

「諸子」の「子」は先生の意。孔子・老子・荘子・墨子・孟子・荀子などをいう。「百家」の「家」は学派の意。儒家・道家・墨家・名家・法家などを指す。

▼ポイント▲　辞書・インターネット・資料集などを利用し、グループで分担して調べさせる。また、図書館にある資料で調べさせてもよい。

時代背景やその風潮を調査することは、「史伝」を理解する上では大事な言語活動になる。それは、その時代に生きた人の考え方は、その時代背景やその風潮というものに影響されるからだ。

授業の最初でも最後でもどちらでもよいので、調査させ、本文理解の一助にしたい。

言葉と表現の解答例

1　「鶏口牛後」「合従連衡」という言葉を、それぞれ辞書で調べてみよう。

【答】鶏口牛後＝大きな集団や組織の末端にいるより、小さくてもよいから長となって重んじられるほうがよいということ。

「鶏口」は鶏の口（くちばし）。弱小なものの首長のたとえ。

「牛後」は牛の尻。強大なものに隷属する者のたとえ。

合従連衡＝その時の利害に応じて、連合したり離反したりするさまざまな策の展開をいう。また、そのかけひき。もとは中国戦国時代、蘇秦の合従策と張儀の連衡策のことをいう。「合従」は南北に連なった趙・魏・韓・燕・斉・楚の六国が、縦の連合をして強国秦に対抗する策で、蘇秦が提唱した。「連衡」はこの六か国が秦とおのおの横に同盟を結ぶ策で、張儀の政策。

「従」は「縦」とも書く。

▼ポイント▲　辞書・インターネット・資料集などを利用し、グループで分担して調べさせる。また、図書館にある資料で調べさせてもよい。

2　「寧ろ」を用いた短文を作ってみよう。

【答】「彼は天才というより寧ろ努力家だ。」「そんなものは寧ろないほうがましだ。」

▼ポイント▲　「寧ろ」は副詞。どちらかといえば。いっそ。二つを比べて、あれよりもこれを選ぶという気持ちを表す。

言語活動の解答例

1　蘇秦の説得の巧みさはどこにあるか、話し合ってみよう。

【答】蘇秦の「説得」が成功した理由は、「説得の巧みさ」にある。そこで、その「説得の巧みさ」を本文に即して分析してみると、以下の二点が指摘できよう。ここで確認しておくが、「説得の巧みさ」とは、対話による巧みな働きかけ（話しぶり・説得の話術）によって、相手が自説や主張に納得し、それを受け入れ・気

持ちや行動が変わるということだ。

一点目は、蘇秦が六国の諸侯たちと秦との関係を利用して合従策の受け入れを説得したところにある。「秦人恐ヨ喝（シヲ）諸侯一、求レ割レ地（カンコトヲ）。」とあるように、六国の諸侯たちは超大国となった秦から領地の割譲を求められていた。そして、このままではさらに秦に圧迫・侵略され、自国存立が危ういと考えた六国の諸侯たちは、秦との関係に思い悩んでいた。そのようなとき、秦を排除し自国存立が可能な最良の方策が、蘇秦から提示される。「合従」策だ。すると、六国の諸侯たちは納得と共感をもってそれを受け入れることになった。

二点目は、六国の諸侯たちが共通に持っていた当時の君主の時代精神を利用して合従策の受け入れを説得したところにある。蘇秦は「寧為ニ鶏口一（ロトモ）、無レ為ニ牛後一（カレルコト）。」という鄙諺（ことわざ）を用いて諸侯たちに合従策を受け入れることを説得する。それは、この鄙諺には、当時の諸侯たちそれぞれが持っていた当時の気風（時代精神）とでもいうべき自尊心・独立心・名誉心が見事に表現されているからだ。

以上、二点より、諸侯たちは蘇秦の巧みな説得によって納得と共感をもって合従策を受け入れるのであった。

▼ポイント▲　ここでは、グループや隣同士で、その巧みさについて話し合わせ、他の人の様々な意見や視点を聞き、自分の意見を創り上げるという言語活動が大事になろう。

さて、指導者はこの活動の前に、場合によっては、話し合うポイントを指示してもよい。それは以下の通り。①説得とは「対話による働きかけによって、相手が自説や主張に納得し、それを受け入れ・気持ちや行動が変わる」こと。②①より、なぜ六国の君主から共感を得るために、「鶏口牛後」ということわざを用いたのか。さらに、諸侯たちがその説得の言葉に、なぜ「共感」したのかも話し合わせる。

話し合うための視点の提示は、黒板に板書してもよいし、プリントで配布してもよい。何も助言を与えずに話し合いをさせるのも、いろいろな視点からの意見が出てくる可能性があり、授業は活発化する。その意味から考えると、助言は意見の固定化につながるかもしれない。

（前田　康晴）